

軟部腫瘍の MRI

青木隆敏 ● 編著

〔評者〕 松田秀一 (京都大学大学院医学研究科 感覚運動外科学講座整形外科 教授)

MRI は軟部腫瘍の診断、治療には必須のものである。まず腫瘍の有無からはじまり、解剖学的な局在、そして軟部組織の質的診断に MRI の情報は非常に重要であることは論を俟たない。本書には、MRI を用いた軟部腫瘍の診断に必要な情報が基礎から応用まで幅広く、しかもコンパクトに記載されている。また、診断のためには軟部腫瘍の病理組織や臨床像の知識も必要である。軟部腫瘍は組織型も多く、すべてを頭に入れておくことはなかなか難しいが、本書には頻度も念頭に置き、代表的な軟部腫瘍の特徴がきれいに整理されて解説されている。本書は一言で言うと、軟部腫瘍の診療上非常に有益な本である。以下にこの本の素晴らしさを列記させていただく。

1. 正常解剖

まず、MRI 画像における正常解剖の解説が非常に有難い。解剖の本は数多くあるが、意外と MRI 画像における解剖 (特に四肢) を本書のように多くのスライスで解説されている本は少ない。通常の解剖アトラスを片手に MRI 画像をみても、腫瘍の三次元的な局在をすぐに理解するのは困難である。診断のためにはもちろん、治療のプランニングにおいては腫瘍の解剖学的な発生部位、そして周囲の血管・神経などの重

要組織との関係は極めて重要である。そこで本書のように豊富なスライス図があれば一目瞭然である。また、研修医の教育などに対してもすこぶる有用である。

2. 撮像法の違い

MRI の本によくみられる 90°パルスの図が出てくると 90% 以上の整形外科医はおそらくその時点で読むのを止めてしまうが、本書では詳しい理論はさておき、それぞれの撮像法の実質的な特徴が詳しく述べられているので、整形外科医にとっても実に有用である。T1 強調像、T2 強調像で高/低信号になるのはどのような組織・状態かという基本的な記述から、拡散強調像の理論そして意義などまで解説してあり、大変わかりやすい。

3. 診断の進め方

MRI で軟部腫瘍がみつかり、軟部腫瘍という一括りにして専門医へコンサルトするだけという、いわゆる思考停止状態に陥ることもままある。本書においては腫瘍内部の質的診断について理論的に詳しく記載されている。脂肪成分、粘液成分、膠原線維成分の中身の見方を実に細かく解説しており、理にかなった画像診断のために必要な知識を得ることができる。また、出血は軟部腫瘍に伴うことも多く、その評価が困難なこ



とも多いが、本書では経時的変化も含めてその評価の方法が詳述されている。

その他、まだまだ本書の長所はあるが、最後にもう 1 つだけ書かせていただくと、本書は表紙やレイアウトが非常にきれいであり、手にとってみたくなる本である。そのあたりに執筆者の先生方のこだわりが感じられる本である。整形外科の外来、そして病棟など日常診療の傍に置いておくと非常に有用な本であることは間違いない。是非ご一読をお勧めしたい。

B5 判・292 頁

2016 年

定価：本体 7,800 円＋税

[ISBN 978-4-524-24035-7]

南江堂刊